

## 北海道肢体不自由特別支援学校における 障害者スポーツについて

Survey of Actual Conditions Concerning Disabled Sports for Special Support  
Schools for Physically Disabled Children in Hokkaido

阿 部 達 彦 <sup>1)</sup>	瀧 澤 聡 <sup>1)</sup>
ABE Tatsuhiko	TAKIZAWA Satoshi
石 川 大 <sup>2)</sup>	磯 貝 隆 之 <sup>2)</sup>
ISHIKAWA Dai	ISOGAI Takayuki
伊 藤 政 勝 <sup>3)</sup>	松 井 由 紀 夫 <sup>4)</sup>
ITO Masakatsu	MATSUI Yukio

### I. はじめに

2020年東京オリンピックが7月24日から8月9日まで、パラリンピックが8月25日から9月6日まで、開催される。これまでの経緯として、2013年第125次IOC総会で、2020年の夏季オリンピック・パラリンピックが東京開催に決定してから、文部科学省内に「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会準備本部」が設置された。その後、日本政府はオリンピック・パラリンピック担当大臣を新設、決定し、7年間に渡り、準備を進めてきた。(東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式ウェブサイト, 公式HP2020)

文部科学省は、2011年6月に、これまでの「スポーツ振興法(昭和36年法律第141号)」を50年ぶりに改正し、「スポーツ基本法」を

公布・施行した。これは、スポーツに関しての基本理念と、国及び地方公共団体の責務並びにスポーツ団体の努力等を明らかにするとともに、スポーツに関する施策の基本となる事項を定めたものである。(文部科学省, 2011)

スポーツ基本法の前文は、「スポーツは、世界共通の文化である」という言葉からはじまり、スポーツの価値や意義、スポーツの果たす役割の重要性が示されている。これらは、オリンピック・パラリンピック精神にも繋がるものであり、国際競技大会における日本人選手の活躍は、国民に誇りと喜び、夢と感動を与え、国民のスポーツへの関心を高める。

また、これらを通じて、我が国社会に活力を生み出し、国民経済の発展に寄与するとしている。また、スポーツの国際的な交流や貢献が、国際相互理解を促進し、国際平和に大

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北翔大学教育文化学部教育学科

3) 北翔大学非常勤講師

4) 北海道手稲養護学校

きく貢献するなど、スポーツは、我が国の国際的地位の向上にも極めて重要な役割を果たしている。(文部科学省, 2011)

このスポーツ基本法の8項目にわたる基本理念の中に、「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進する」ことが示されているが、このことは、障がい者スポーツの重要性を表し、2020パラリンピックにも繋がるものである。

「日本パラリンピック委員会」は、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の内部組織として、1999年に厚生省の認可を受け、発足した。長野パラリンピック(1998)以降、遅れがちであった競技スポーツの分野を促進するため「日本パラリンピック委員会」が、障がい者を国際競技団体に参画させ、競技大会への派遣や選手強化を担い、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の特別な事業として位置づけてきている。(日本障害者スポーツ協会HP, 2020)

2020東京パラリンピックの組織は、日本障害者スポーツ協会に、準備委員会(2013)として設置されたが、その後、2014年に一般財団法人として「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」が設立され、2015年に公益財団法人として、現在に至っている。組織委員会は、東京2020大会の成功に向け、JOC、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会(JPC)、東京都、政府、経済界、その他関係団体と共にオールジャパン体制の中心となり、大会の準備及び運営に関する事業を行っている。(東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式ウェブサイト, 公式HP2020)

2020東京パラリンピックを含め、今後の障がい者スポーツの振興のためには、アスリートの発掘と養成が急務であり、そのための継続的な組織作りと事業の展開が、各地域で求められている。

現在、障がいのある方のオリンピックに類する国際大会には、大別して三種類ある。

第1は、「デフリンピック」である。聾や聴覚障害者の大会で、1924年フランスで、第1回大会が開催された。2013年のソフィア大会では、90カ国2821名が参加している。

第2は「スペシャルオリンピックス」である。知的障害者の方の世界競技大会で、アメリカで始まり、2015年ロサンゼルス大会では、7000名が参加している。このスペシャルオリンピックスは、参加することに意味があるとの考え方から、順位や記録を争うことに重点をおかず、参加者や完走者全員が表彰される。

第3は「パラリンピック」で、1960年にローマ(イタリア)で初めて開かれた。「このときは「インターナショナル・ストークマンデビル大会」(イギリス発祥)という名称であったが、第2回の東京大会で「パラリンピック」という日本語の造語としての名称が使われはじめた。正式には、1988年のソウル大会から、さかのぼって「パラリンピック」という名称が使用されるようになり、その後、現在の「スリーアギトス」のシンボルマークが、パラリンピックシンボルマークとして正式に決定された。(日本財団パラリンピック研究会, 2015)

現在、パラリンピックにおいては視覚障害者や肢体不自由者等の身体障害者の方の競技種目が中心に実施されている。

これらの障がい者スポーツの世界や国内の

流れの中で、アスリートの発掘と障がい者の身体能力の測定及び障がい者スポーツの体験事業を各都道府県や地域が中心なり実施してきている。

北海道においては、昨年から北海道総務課が中心となり、各大学や障がい者スポーツ団体と連携・協力する中実施してきた。

北海道環境生活部スポーツ局スポーツ振興課においては、本学と協力し2018年と2019年の2年間、北海道パラアスリート発掘プロジェクトと称し、体力測定会とパラスポーツ体験会を実施した。これは、パラリンピックなどの国際大会に向けて、多くの「どさんこ」選手が国際大会で活躍することを目指し、優秀なパラアスリートを発掘するためのプロジェクトの一環として実施された。2019年度の測定項目としては、形態測定（慎重・体重）、握力（筋力）、長座体前屈、肩関節柔軟性（柔軟性）、立ち幅跳び、垂直飛び、メディシンボール投げ（筋パワー）、全身反応時間、20mシャトルラン（持久力）を実施した。年齢は、満12歳の中学生以上で、障がいのある肢体不自由者や知的障害者でトップアスリートを目指した方を対象とした。（北海道スポーツ振興課，2019HP）この体力測定会とパラスポーツ体験会は、道内の各障がい者スポーツ団体の参加，協力を得て，盛会の内に終了したが，今後の道内のパラアスリートの養成に当たっては，障がい者スポーツに親しむ者や若年層の幅広い底辺の拡大が，緊喫の課題とされた。

そこで，北海道における肢体不自由特別支援学校において，どの程度，パラスポーツや，障がい者スポーツが認知されているか，また肢体不自由特別支援学校での体育や学校教育

全体の中で，どのような種類の障がい者スポーツが実施されているか調査し，今後の発掘プロジェクトの参考にするため，アンケート調査を行い，現状と課題を検討することにした。

## Ⅱ．研究方法

### 1 アンケート調査

北海道の肢体不自由特別支援学校8校に，パラスポーツの実施状況の調査アンケートを送付し，その回答を集計する。高等養護学校単置校1校，寄宿舎併設の小・中・高の単独校4校，主に医療・療育施設から通学する幼・小・中・高の併設校2校（1校は肢体不自由・病弱校），施設併設の小・中・高1校の8校に調査を実施した。

### 2 文献研究

文部科学省の実施している特別支援学校のスポーツ環境に関する調査（2014）や笹川スポーツ財団特別支援学校のスポーツ環境に関する調査（2018），及び全国特別支援学校長会で実施している「みんなdeスポーツ，特別支援学校のスポーツ環境に関する調査（2017）等を参考に，全国の状況と北海道の肢体不自由特別支援学校の現状とを比較することにした。なお，2019年度にも，同様の調査が全国特別支援学校長会で実施されているが，現状では速報値しかでていないため，公式値が発表された時点で，比較することとし，今回の検討からは除いた。

### 3 アンケート調査の概要

#### （1）調査の目的

北海道肢体不自由特別支援学校における障

がい者スポーツの現状について調査し、北海道のパラスポーツ等の推進についての、今後の資料を得ることを目的とする。

※肢体不自由者は、特別支援学級、普通学級、知的障害特別支援学校等にも在籍しているが、今回の調査は、主に北海道の肢体不自由特別支援学校に在籍している、中学部・高等部生で、「準ずる」教育課程で学んでいる生徒の障がい者スポーツについて、現状を調査しまとめることとした。

#### (2) 調査期間

令和1年12月から令和2年1月まで

#### (3) 調査の対象及び調査の配布学校

北海道肢体不自由特別支援学校8校（札幌市立肢体不自由特別支援学校を除く）

教頭又は教務担当及び体育指導者等障害者スポーツの理解者

#### (4) 調査票回収学校数

6校（回収率75%）

中学部 5校

高等部 6校（単置校含）

調査実施校が少ないため、パーセント表示はせず、実数で報告することにする。

### Ⅲ. 調査結果

#### 1 北海道パラアスリート発掘プロジェクト（体力測定会、パラスポーツ体験会）について

(1) この授業を知っていた 4校

(2) 知らなかった 2校

地方の肢体不自由特別支援学校の周知率が悪かった。

#### 2 貴校の地域や学校でパラアスリートの体力測定会やパラスポーツ体験会があれば、

参加してみたい生徒はいると思いますか。

（種に中学部生・高等部生）

(1) 参加してみたい生徒はいると思う 4校

(2) 参加してみたい生徒はいないと思う 1校

(3) わからない 1校

各地方でパラスポーツ体験会を実施するとよい。

#### 3 2020東京オリンピック・パラリンピックの一環として、体育の授業や運動会、体育祭、余暇活動など、教育活動全般で障害者スポーツを実施していますか。

(1) 実施している 3校

(2) 2020東京オリンピック・パラリンピック教育の一環としては実施していない 2校

(3) その他 1校

（ボッチャ、フライングディスクを寄宿舎の余暇活動として実施している）

何らかのかたちで、パラスポーツを実施している学校が多い。

#### 4 自立活動や体育の授業、そのほかの教育課程上の時間の中で、ストレッチや体操及び歩行や走力に関する運動（持久力の向上）を、どのような頻度で実施していますか。（高等部の平均的回答）

(1) 体操（ラジオ体操、テレビ体操、その他の体操、準備運動、整理運動を含む）

①毎日実施 3校

②2～3日おきに実施 2校

③一週間に一度程度 1校

(2) 体操以外のその他の身体運動やストレッチ運動

①毎日実施 5校

②2～3日おきに実施 0校

- ③一週間に一度程度 1校
- (3) 散歩・ウォーキング(ゆっくり歩く)
- ①毎日実施 3校
- ②2～3日おきに実施 2校
- ③一週間に一度程度 0校
- ④月に1～2度 1校
- (4) ジョギング・ランニング・マラソン(走る)
- ①毎日実施 2校
- ②2～3日おきに実施 1校
- ③一週間に一度程度 1校
- ④月に1～2度 0校
- ⑤その他(実施なし) 2校
- (5) 体育の授業やその他の教育課程上の時間の中で、どのような競技種目をしているか、実施していると思われる種目に印をつけてください。(中学部5校・高等部単置1校)
- ①陸上競技(ウォーキング, マラソン, 障害物, ハードル等)
- 中学部 4校
- 高等部 5校(単置校含)
- ②サッカー(フットサル, 車いすサッカー, 電動車いすサッカー, ブラインドサッカー等)
- 中学部 1校
- 高等部 2校(単置校含)
- ③バスケットボール(車いすバスケットボール等含)
- 中学部 1校
- 高等部 2校(単置校含)
- ④バトミントン(車いすバトミントン等)
- 中学部 1校
- 高等部 2校(単置校含)
- ⑤卓球(車いす(バラ)卓球等含)
- 中学部 1校
- 高等部 2校(単置校含)
- ⑥フライングディスク(障害者フライングディスク, ディスタンス, アキュラシー等含)
- 中学部 0校
- 高等部 0校(単置校含)
- ※寄宿舎の余暇活動で実施 1校
- ⑦野球(ティボール, ごろ野球, 車いす野球等含)
- 中学部 1校
- 高等部 4校(単置校含)
- ⑧ソフトボール(車いすソフトボール等含)
- 中学部 0校
- 高等部 0校(単置校含)
- ⑨バレーボール(ソフトバレーボール, シッティングバレーボール, 風船バレー, ローリングバレーボール, フロアバレーボール等含)
- 中学部 3校
- 高等部 4校(単置校含)
- ⑩テニス
- 中学部 0校
- 高等部 0校(単置校含)
- ⑪ボッチャ
- 中学部 4校
- 高等部 5校(単置校含)
- ⑫カーリング(車いすカーリング, フロアーカーリング等含)
- 中学部 4校
- 高等部 4校(単置校含)
- ⑬ボウリング(車いすボウリング等含)
- 中学部 3校
- 高等部 3校(単置校含)
- ⑭トランポリン
- 中学部 3校
- 高等部 4校(単置校含)
- ⑮マット運動, 器械運動(サーキット運動等含)

中学部 3校  
 高等部 4校(単置校含)  
 ⑯冬季競技((アルペンスキー, スノーボード, ソリ, スケート距離・クロスカントリースキー, スノーシュー等含)  
 中学部 2校  
 高等部 2校(単置校含)  
 陸上競技関係(ウォーキング, ランニング, ジョギング, 障害物), 野球関係(ティボール, ゴロ野球, 車いす野球等), バレーボール関係(ソフトバレーボール, シットティングバレーボール, 風船バレー, ローリングバレーボール, フロアーバレーボール等)の他, ボッチャ, フロアーカーリング, ボーリング, トランポリン, マット運動・器械運動(サーキット運動)など多様な運動やスポーツを児童生徒の実態に応じて実施していることが読み取れる。校数は少ないもののサッカーやバスケットボール, バドミントン, 卓球等のスポーツも実施されている。冬季競技も中学部2校, 高等部2校で実施されていた。

(6) 次のパラリンピック種目の中で, 平成30年4月から, 現在までに各学校の在学学生で(教育課程上, 余暇活動を問わず)児童生徒が, 一度でも体験又は実施したことがあると思われる種目に印をつけてください。

- ①陸上競技  
 体験実施した学校 4校  
 ②ボッチャ  
 体験実施した学校 6校  
 ③5人制サッカー  
 体験実施した学校 1校  
 ④ゴールボール  
 体験実施した学校 1校

- ⑤射撃(パイアスロン可)  
 体験実施した学校 1校  
 ⑥シットティングバレーボール  
 体験実施した学校 1校  
 ⑦水泳(水治訓練, プール可)  
 体験実施した学校 3校  
 ⑧卓球  
 体験実施した学校 3校  
 ⑨車いすバスケットボール  
 体験実施した学校 2校  
 ⑩車いすフェンシング  
 体験実施した学校 1校  
 ⑪車いすラグビー  
 体験実施した学校 1校  
 ⑫車いすテニス  
 体験実施した学校 2校  
 ⑬車いすバドミントン  
 体験実施した学校 2校

#### 体験・実施しなかった競技種目

アーチェリー, カヌー, 自転車, 馬術, 7人制サッカー, 柔道, パワーリフティング, ボート, セーリング, トライアスロン, テコンドー, 車いすアルペンスキー, 障害者クロスカントリースキー, スノーボード, スノーシューティング, シュートトラックスピードスケート, フィギアスケート, フロアーホッケー

ここ1年ほどで, 体験したパラリンピック種目で一番多かったのは「ボッチャ」であった。

(7) 次の種目は体育や学校行事(運動会, 体育大会等), 余暇活動等で, 実施したことはありますか。

- ①綱引き  
 中学部実施校 0校  
 高等部実施校 1校(高等部単置校含)  
 ②玉入れ



中学部実施校	3校
高等部実施校	3校(高等部単置校含)
③短距離走	
中学部実施校	3校
高等部実施校	4校(高等部単置校含)
④中・長距離走	
実施した学校	0校
⑤車いすスラローム	
中学部実施校	2校
高等部実施校	3校
⑥遠投(ビーン投げ, ジャベリック投げ, ソフトボール投げ, 砲丸投げ等)	
中学部実施校	1校
高等部実施校	2校(高等部単置校含)
⑦リレー, 駅伝等	
中学部実施校	3校
高等部実施校	4校(高等部単置校含)
⑧ゲーリング, ゲートボール, ミニゴルフ統	
中学部実施校	0校
高等部実施校	1校(高等部単置校含)
⑨ボーリング, 玉転がし, 的当て	
中学部実施校	5校
高等部実施校	4校(高等部単置校含)
⑩オリエンテーリング等	
中学部実施校	1校
高等部実施校	1校(高等部単置校含)
⑪幅跳び	
中学部実施校	1校
高等部実施校	2校(高等部単置校含)
⑫高跳び	
中学部実施校	1校
高等部実施校	2校(高等部単置校含)
陸上短距離やスラローム, リレー, 玉入れ, ボーリング, 的当て, 玉転がしなどが多く実 施されている。	

(8) 準ずる教育課程の小学部・中学部・高等部の体育の運動領域について、貴校の教育課程で位置づけられている運動・スポーツ種目で該当するものに印をつけてください。

※ 準ずる教育課程がある学校4校(うち高等部単置校1校)

※ 準ずる教育課程がない学校2校(令和1年度)

#### ①体操

小学部	3校
中学部	2校
高等部	3校

#### ②陸上競技

小学部	3校
中学部	2校
高等部	3校

#### ③器械運動

小学部	0校
中学部	0校
高等部	1校

#### ④水泳・水中運動

小学部	3校
中学部	2校
高等部	2校

#### ⑤バスケットボール

小学部	0校
中学部	0校
高等部	1校

#### ⑥バレーボール

小学部	1校
中学部	1校
高等部	2校

#### ⑦サッカー, フットサル

小学部	0校
-----	----

中学部	0校	カーリングが実施されており、ゴルフ・ゲートボール・ボーリング・フリースビー、ホッケー等は教育課程上の位置づけはなかった。
高等部	1校	
⑧ダンス		
小学部	2校	
中学部	2校	(9) 8で該当する項目がないものについては、下記に記入してください
高等部	2校	すべての学校で、無記入であった。
⑨エアロビック		
小学部	0校	(10) 障がいが中度、重度の児童生徒に実施している運動種目やスポーツの種目があれば下記に記述してください。
中学部	0校	
高等部	1校	
⑩武道（柔道・剣道・弓道）		①小学部の中度・重度の児童に実施している特徴的な運動・スポーツ種目
小学部	0校	＜ボッチャ・水中運動・ボウリング・転がしドッジボール・T（ティ）野球・正確ボール転がし・ストレッチ・ウォーキング・ランニング・玉入れ等＞
中学部	1校	②中学部の中度・重度の生徒に実施している特徴的な運動・スポーツ種目
高等部	2校	＜ボッチャ・水中運動・ボウリング・正確ボール転がし・フロアーカーリング・マット運動・ストレッチ・ウォーキング・ランニング・ダンス・トントン相撲・ゴロ卓球・風船バレー等＞
⑪体づくり		
小学部	2校	③高等部の中度・重度の生徒に実施している特徴的な運動・スポーツ種目
中学部	1校	＜ボッチャ・水中運動・ボウリング・T（ティ）野球（ボール）・フロアーカーリング・マット運動・ストレッチ・ヨガ・ウォーキング・ランニング・リレー・風船バレー・ゴロ卓球等＞
高等部	2校	
⑫卓球		
小学部	0校	
中学部	0校	
高等部	1校	
⑬ソフトボール・野球		
小学部	1校	
中学部	1校	
高等部	2校	
⑭その他 1		
ハンドボール・バトミントン・テニス・冬季スポーツ（スキー：アルペン、クロスカントリー、ソリ等）・冬季スポーツ（スケート：スピードスケート、フィギア、アイスホッケー等）については、各学部とも該当なし		
⑮その他 2		
高等部単置校にて、ボッチャ・フロア		

## (11) ボッチャについての調査

## ①ボッチャの実施について

ボッチャを学校（寄宿舎）で実施したところがある 6校

ボッチャを学校（寄宿舎）で実施したこ



とが実施したことがない	0校
②ボッチャの用具（ボール一式）について	
学校（寄宿舎）にある	6校
学校（寄宿舎）にない	0校
③ランプ（傾斜台）等について	
学校（寄宿舎）にある	5校
学校（寄宿舎）にない	1校
④ボッチャは何セットありますか	
不明（未記入）	2校
1セット	1校
2セット	2校
5セット	1校
⑤ボッチャのコートについて（複数回答可）	
ラインテープでボッチャコートを、常時作成してある	1校
既存のパレーコートやバトミントンコートのラインで代用している	4校
その都度、ラインを引く（ラインテープを貼る）	1校
特にラインは引かずに、三角コーンや目印、紐等で代用している	3校

ボッチャについては、全ての学校で実施されていた。用具等についても学校で準備しているが、コートについては、常設されておらず、その都度、簡易的なものを利用して実施している。

#### Ⅳ. 考 察

北海道の肢体不自由特別支援学校は、札幌市立肢体不自由特別支援学校が2校、北海道肢体不自由特別支援学校が8校の計10校であるが、それぞれの学校に在籍している児童生徒の実態の違いや各地域における特色の違いがある。また、寄宿舎を併設している学校や

医療施設や療育施設等併設の学校等通学の形態もさまざまである。

今回の調査では、札幌市立の肢体不自由特別支援学校2校は除外した。この2校は、重複障害を主とした重度重複障害の児童生徒を対象とした通学校であり、教育課程上、「準ずる教育」課程に該当する児童生徒は、在学していないためである。（札幌市立肢体不自由特別支援学校ホームページ、令和1）そのため、運動等は教科別の体育や領域・教科を合わせた指導よりも、医療的ケア対象児を主とした、自立活動が中心となるためである。

今回の調査目的の、パラリンピック種目を教育課程上に位置づけて行うには、実態としてかなり厳しいため予め調査対象から除くことにした。その他の北海道の肢体不自由特別支援学校でも、令和1年度において「準ずる教育」課程を設けていない学校は、2校あり、知的障害の各教科や領域・教科を合わせた指導や自立活動を主とした教育課程中心の指導になっている。

パラリンピックの種目と比較的リンクした教育課程や教育活動を実施している学校は、高等部単置校である。義務校併設の高等部では、その設置基準から、重複障害の生徒が多いため基礎的な体操や体づくり、散歩やウォーキング、ボッチャ、ボウリング、トランボリンが種目として多くなっている。

肢体不自由特別支援学校高等部単置校では、基本的には「準ずる教育」課程のため、多彩な運動やスポーツが教育課程上計画され、パラスポーツと関係のある種目も体育の他、学校行事等も含め、学校教育全体の中で実施されている。

医療併設や療育施設の肢体不自由特別支援

学校では、医療や治療・訓練との関係があるため、関係機関と十分に連携・相談しながら運動やスポーツも実施する必要があるため、限られた種目の実施になることも多い。

「2020年東京オリンピック・パラリンピック教育」の一環として体育やスポーツを位置づけて実施している学校は、今回の調査で3校あり、特に高等部単置校では、パラリンピック種目の体験を実施し、生徒の積極的体験を支援しようとしている。

北海道の肢体不自由特別支援学校では、ほとんどの学校にボッチャの用具が整備されており、学校や寄宿舎など学校教育全体を通して、実施されている。今後、興味を持った児童・生徒の育成のため、保護者と連携しながら、地域の競技団体と連携し、練習する機会や大会参加が増えてくると、北海道肢体不自由特別支援学校からのアスリート輩出も夢ではなくなる。

次の写真は、北翔大学で実施された北海道主催の体力測定会・パラスポーツ体験会である。

この写真のような、体力測定会やパラスポーツ体験会を各地で開催し、特に各地域の行事や肢体不自由特別支援学校の学校祭などとタイアップし、保護者や地域住民と一緒に児童生徒にも体験してもらうようにすると、パラスポーツの底辺の拡大に繋がるのではないと思われる。

高等部単置校では、「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」として、2019年度（令和1年）12月にパラリンピアンへの講演会やスポーツ交流会を実施し、車椅子フェンシングの体験会を実施したり、11月にはボッチャのスポーツ交流会も実施している。また、2018年度には、卒業生を講師に招いて車椅子バスケットの体験会も行った。

これらの、体験会や講演会をとおしてパラスポーツに親しみ、生涯スポーツへと結びつ



写真1 体力測定会・パラスポーツ体験会 案内机（2019・10・6 北翔大学）



写真2 体力測定会・パラスポーツ体験会 (2019・10・6 北翔大学)  
各種義足・カーボン義足体験コーナー



写真3 体力測定会・パラスポーツ体験会 案内机 (2019・10・6 北翔大学)  
ボッチャ体験コーナー





写真4 体力測定会・パラスポーツ体験会 案内机 (2019・10・6 北翔大学)  
車いすフェンシング体験コーナー

くよう継続的な取り組みを期待する。

全国の特設支援学校のスポーツ環境に関する調査（文部科学省，2014）によると，小学部から高等部を通じて，肢体不自由特別支援学校では，「ボッチャ」とハンド「ハンドサッカー」の実施率が高い傾向が見られたが，北海道では「ボッチャ」については，いずれの学校でもとり組まれていたが「ハンドサッカー」については，種目としてとり組んでいる学校はほとんど無かった。その代わり「ゴロ野球や」や「Tボール」等が種目として取り組まれている。ボッチャ以外の北海道のパラスポーツの振興策として，肢体不自由特別支援学校高等部単置校に，北海道全域から，パラアスリートの有望な人材が集まる傾向にあるので，高等部単置校と情報交換しながら，若いパラアスリートの養成に努めることも一案である。しかしながら，高等部生は，自力

ではパラアスリートとしての活動は，現状としては厳しいものがあるため，卒業後の活動を主に考えながら支援していくことが必要である。そのため，高等部生には，いろいろなパラスポーツ競技を体験し，将来自分に合った競技を見出せるよう，支援することが，中・長期ビジョンとして大切と考える。北海道の地域性の特性として，広域性が上げられ，札幌周辺の道央地域に施設設備やスポーツ団体，指導者等の人材が偏在しているため，地方のパラスポーツ振興をいかに図るかが課題である。

北海道のパラアスリートの今後の発掘を考えると，次のような内容を課題としてまとめた。

## 1 パラアスリートの人的な問題

障がい者スポーツのすそ野（底辺）の拡

大を図る必要がある。

特に、本人自身のパラスポーツへの関心と意欲の向上が大切で、パラスポーツをする仲間づくりとともに、保護者や家庭、教師等を含め身近な人の励ましが必要である。また、地域の支援組織があることにより、本人のやる気（意志）を引き出し、種目適性を見極めることやデビジョニング（クラス分け）ができる人材（医師）の養成が大切である。

## 2 保護者、家庭のパラスポーツに関する理解と協力がパラスポーツ参加を促す基になる。

パラスポーツは、ほかのスポーツと比べて、用具や道具に経費が必要であったり、練習会場や大会参加会場まで遠距離であることが多く、車いすの送迎等を含め経済的、時間的、人的な必要性が高い。これらの負担を少しでも軽減するためには、個人で活動するには限界があり、ボランティアを含め、組織づくりが必要になる。特に、各地方にパラスポーツを根付かせるためには、核になる組織の存在が重要であり、また一般企業や各種団体の支援が継続的に行われるように、啓発していくことが大切である。

## 3 環境の整備

各地域での練習施設、指導者の養成、体験会、体力測定会、競技大会の計画とその実施については、今までパラスポーツを知らなかったり、体験できなかった肢体不自由者にとり、大きな刺激となる。しかしながら、デビジョニング（クラス分け）や各パラスポーツ競技団体との連携、夏季競技、冬季競技の適性の把握等地方組織や個人で

行うには、厳しいものがある。特にデビジョニング（クラス分け）については、日本全体でも人材に限られ、特に北海道では、確保が難しいため、クラス分けの境界付近のアスリートは、大会ごとにデビジョニング（クラス分け）が異なることも珍しくない。これらについては、専門的知識を持った医療関係者（医者）を巻き込みながら、進めていく必要がある。

また、支援組織・団体の拡充（支援企業、民間スポーツ組織の支援、ボランティアの拡大）自治体や地域・学校等との連携も大切で、各地方に中心となるセンター的な設備を持ったパラスポーツができる施設を立ち上げていく必要がある。特に、高齢者と共用できるようなスポーツ施設であれば、生涯スポーツの一環として実現は可能と思われる。高齢者や健常者にも、パラスポーツを普及させ、スペシャルオリンピックで掲げているような健常者とともに競技を行うようなユニファイドスポーツとしても発展させていくことが望ましい。視覚障がい者・肢体不自由者のパラスポーツだけでなく、知的障がい者（スペシャルオリンピック）や聴覚障がい者（デフリンピック）、病弱者や他の障がい者も共に活用できる施設設備の拡充が求められる。また、その施設で利用できる、用具や道具の整備と開発等の支援も重要である。例えば、スポーツタイプの車いすを持参しなくても、パラスポーツ施設（多目的施設）に行けば、借りることができるだけでも、パラスポーツの拡充に繋がる。また、その施設を中心として、合宿することができるようになれば、アスリートの競技力は大幅に向上すること

は間違いない。

2020東京オリンピック・パラリンピックまであと数か月となり、パラアスリートの代表者が次々と内定しているが、パラリンピックでは代表経験者が長い期間アスリートとして活躍する傾向にある。ベテランアスリートは、頼もしい限りであるが、10代の若いアスリートがどんどん育ってほしいと願っている。これらが切磋琢磨する中で、社会全体により影響を及ぼし、生涯スポーツの振興が図られていくと考える。

2020東京オリンピック・パラリンピックの「スポーツ・健康」、「街づくり・持続可能性」、「文化・教育」、「経済・テクノロジー」、「復興・オールジャパン・世界への発信」の5本のレガシー（遺産）が達成され、将来の日本社会に素晴らしい影響を与えることを願うものである。

## 文 献

- 1) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式ウェブサイト, 公式HP (<https://tokyo2020.org/jp/>), 2020.
- 2) 文部科学省, スポーツ教育法, ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/kihonhou/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/index.htm)), 2011.6.
- 3) 文部科学省, スポーツ基本法の公布について（通知）, ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/kihonhou/attach/1307834.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307834.htm)), 2011.6.
- 4) 一般社団法人：全国地域生活支援機構, 障害者スポーツとは？～障害のある方のスポーツへの参加, (<https://jlsa-net.jp/hattatsu/syougaisya-sports>), 2018.
- 5) 公益財団法人 日本体育協会 HP, 障害者とスポーツ, ([https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/publish/pdf/h24\\_seigo2\\_25.pdf](https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/publish/pdf/h24_seigo2_25.pdf)), 2020.
- 6) 公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会HP, (<https://www.jsad.or.jp/>), 2.
- 7) 日本財団パラリンピック研究会, 紀要第3号, (<http://para.tokyo/uploadimages/Vol3.pdf>), 2015.
- 8) 北海道環境生活部スポーツ局スポーツ振興課オリンピック・パラリンピック連携室HP, (<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ssk/index.htm>)
- 9) 北海道パラアスリート発掘プロジェクト（令和元年度2019年）, (<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ssk/para-tid-2019.htm>)
- 10) 北海道肢体不自由特別支援学校各学校ホームページ, 学校案内・学校要覧（8校）, 2019.
- 11) 札幌市立肢体不自由特別支援学校各学校ホームページ, 学校案内・学校要覧（2校）, 2019.
- 12) 厚労省HP, 障害者スポーツ, ([https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaisyahukushi/sanka/sports.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisyahukushi/sanka/sports.html)), 障害者スポーツの支援体制について, 2014.
- 13) 藤田紀昭, 小渕和也, 河西正博, 齋藤まゆみ, 中森邦男, 浅見俊雄：2018年度障害者スポーツを取り巻く社会的環境に関する調査研究—パラリンピアン, 競技団体, 大学, 地域現場に着目して—, 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団, 2019. 3.
- 14) 日本財団：パラリンピックとはなにか～その社会的, 経済的, 政治的な意味を探



る～，内外情勢調査会 札幌支部懇談会，  
2015. 10.

- 15) 後藤千明：特別支援学校（肢体不自由）  
における生涯スポーツに向けての体育の授  
業に関する調査研究，([https://www.juen.  
ac.jp/lab/kasahara/shouroku/H29chiaki.  
pdf](https://www.juen.ac.jp/lab/kasahara/shouroku/H29chiaki.pdf)), 2017.
- 16) 笹川スポーツ財団：特別支援学校のス  
ポーツ環境に関する調査，([https:// www  
.google.com/search?ei=YSw6Xo-cFvKW7  
wP6de00A4&q](https://www.google.com/search?ei=YSw6Xo-cFvKW7wP6de00A4&q)), 2018.
- 17) 文部科学省：特別支援学校のスポーツ環  
境に関する調査，([https://www.mext.go.  
jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_  
icsFiles/afieldfile/2014/05/20/1347286\\_5.  
pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/05/20/1347286_5.pdf)), 2014.
- 18) 全国特別支援学校長会：みんなdeスポー  
ツ，特別支援学校のスポーツ環境に関する  
調査報告書，平成29年度版 ([http://www.  
zentoku.jp/houkoku/pdf/h29\\_minna\\_de\\_  
sports.pdf](http://www.zentoku.jp/houkoku/pdf/h29_minna_de_sports.pdf)), 2017.
- 19) 財団法人日本障害者スポーツ協会：障害  
者スポーツ指導教本初級・中級，2009.

